

社 報

いせやま

第二十六号

戦後八十年 平和を祈る

目次

戦争を体験した三人の体験談	1
藤木幸夫さん	2
杉島和三郎さん	5
呉正男さん	8
いせやま昭和写真帳	11
いせやま歳時記	13
お知らせ 崇敬会創立六十年	15

昭和20年5月29日横浜大空襲で燃える横浜市街を空撮（アメリカ国立公文書館所蔵）



伊勢山皇大神宮

戦争を体験した
三人の体験談

令和七年は昭和百年、戦後八十年にあたり
ます。横浜の守り神をお祀りする伊勢山皇大
神宮においては、神社が平和を祈る場所である
ことを改めて認識し、今回の社報ではこの年に
ふさわしく「戦後八十年 平和を祈る」を主題

にいたしました。伊勢山皇大神宮にゆかりの深
い三人の方から、戦前戦中を生き抜いて来られ
た貴重な体験談をお聞きすることができました。
戦争を体験された方々が少なくなるなか、その
お話しはますます貴重なものとなり、それを語
り継ぐことが重要になっています。

今回協力くださったのは、藤木幸夫さん（昭
和五年生）、杉島和二郎さん（昭和三年生）、呉正
男さん（昭和二年生）です。

いずれも九十代半ばを超えられた各々の人

生のなかで、戦争とどのように直面したのか、
どのように生き抜いて来たのか。戦後復興を
担ってくださり、戦争と平和のどちらも身をもつ
て知っておられるお三方の平和を祈るお気持
ちをしっかりと受け止め、そして未来へと繋い
でいくことが神社の使命と考えております。

お参りくださるみなさまの平和への願いが
増すことになれば幸いです。

（宮司・阿久津裕司）

◀ 昭和20年5月29日横浜大空襲で燃える横浜市街を空撮



◀ 空襲で焼け野原となった桜木町駅周辺から関内方面



◀ 同じく関内方面。中央の太い塔が県庁、右の細い塔が税関



藤木幸夫さんの話

“死ぬのが仕事”から
生き残り、生き抜いてきた

一 幼少期、伊勢山の思い出

生まれ育ちは戸部です。老松
小学校附属幼稚園に入りました。
私の手元には当時の集合写真が
残っています。（次頁右）真ん中
にいるのが小学校の校長先生。
写っている先生の名前は憶えて
います。友達もどこのウチの子、
この子のウチは〇〇屋さんとい
うのを今でも言えます。

老松小学校に通うようになっ
たら、学校帰りは毎日のように
伊勢山皇大神宮に寄っていました。
境内には日清日露戦争での

藤木幸夫さん

昭和五年（一九三〇）横浜市生まれ。老松小学校から県立工業学校（現・
神奈川工業高校）、早稲田大学政経学部卒。父幸太郎さんの後を継いで
港湾荷役等の社業を通して、ミナトの復興、近代化、国際化に貢献。数多
くの公職にも就く。宗教法人伊勢山皇大神宮責任役員。

戦利品があつて、それを眺めたり、
昼寝をして過ごしたりしていま
した。伊勢山は幼い私のベッド
ルームみたいなものだったです
ね。それだけ身近で心安らぐ存
在でした。一方で「ここは神域な
んだ」というような意識もあり
ました。

五月十五日伊勢山皇大神宮の
例大祭では、小学校や銀行など
は休みでした。東京の学校に行っ
てる子は登校しているのに、自
分たち横浜の学校は皆祝日だっ
たので、子供心にうれしかった
ですね。伊勢山皇大神宮は、キチ

ンとした、オフィシャル（公的）
な存在だった、ということなん
でしょうね。横浜全体がみんな
で伊勢山の例祭をお祝いする、
そういう雰囲気でした。

二 青年期、戦争体験

小学校を卒業して旧制の県立
工業学校に入学しました。昭和
十八年のことです。その頃は戦
争中でしたから、学校では軍事
教練があり、戦争用の製品を作っ
たりしていました。「天皇陛下
のために死ぬのが仕事だ」と叩

市立老松小学校附属幼稚園の集合写真



県立工業学校(現 神奈川工業高校)生徒で終戦を迎えた。



き込まれていました。父からは「いい若い者がこんなところで何をしている。早く兵隊に行つて死んで来い」とも言われました。海軍兵学校を志望したのですが年齢がわずかに達しないうちに、終戦を迎えました。私は八月十八日生まれなのです。八月十五日の玉音放送で戦争は終わり、私は三日違いで死ぬことはなくなったのでした。「天皇陛下が戦争を終わらせてくださったのおかげで生きている。これからしっかりと生きていこう」と思うようになりました。

戦争中は多くの「死」に直面しました。空襲警報がなると防空壕に入ります。水がポタポタ落ちているところで本を読んだりするので。「藤木君、これをお食べ」。蒸かした指ほどのサツマイモをくれた近所のおばさんが、その晩空襲にあい焼け跡で亡くなっていました。友達のお母さ

んでした。

学校では結婚してまだ二か月ほどの若い先生が直撃弾を受けて即死してしまいました。ご遺体をご家族のもとに届けたのですが、それが良かったのかどうか今でも分かりません。その時は夢中でそうしたのです。

死体を焼くこともしました。火葬場に持つていくこともできませんから、その場にいる誰かがそれをしなくてはいけないのです。しかし燃やす薪もなく松の木を切つて火をつけました。戦争はもう二度とゴメンです。

三 戦後復興、伊勢山皇大神宮役員に

私は工業学校生徒の頃から野球が好きで、野球部に入り捕手で主将をしていました。

戦争のためにやがて道具もなくなりグラウンドも使えないようになりました。敵性スポーツ

と言われ肩身が狭い思いもしました。

終戦後、横浜は港など主要部が接収されました。米軍相手の仕事などを懸命にこなすなか、米軍兵士たちのチームと野球の試合をやったこともあり、貧しかったけれど復興に汗を流し、懸命に働きました。

港の仕事がコンテナ化で大きく変わるとき、時代に対応しようと必死に対処しました。働く仲間たちで助け合い、暮らしを向上させるよう頑張りました。欧州の港から多くのことを学び、また中国との友好を深めたりしました。焼け跡だった横浜も三百万都市へと復興・発展をとげ東京に次ぐ日本第二の都市となりました。

伊勢山皇大神宮の参道にある玉垣には、磯野庸幸さん、山口久像さんなど横浜を代表する人の名前がありました。横浜の人た

学生時代から野球に励み、工業学校時代は捕手で主将を務めた。



昭和30年頃当時の総理大臣石橋湛山氏(中央)を三溪園に案内する藤木さん(左端)。(石橋総理は早稲田大学の先輩、三溪園の創設者原富太郎氏も早稲田大学の前身東京専門学校出身)



ちが自分たちの心の拠り所としての伊勢山を大切にしてきた歴史が感じられます。横浜をよい町にしたいと願っていた自分にも先輩から声がかかり伊勢山皇大神宮の役員に就くことになりました。厳しい場面もありましたが、抜けることなく今まで務めてきました。

四 今、若い人に伝えたいこと

令和七年は戦後八十年ということもあり、戦争についての話を求められることも多くなりました。戦争体験というものは、どんな生活をしたかということ。何を食べてどんな気持ちだったのか、それを伝えるのは自分たちしかないのですから。死と向かい合つて心の試練をくぐり魂に磨きをかけてきた精神的力を、どのように次の世代に伝えていけるのだろうか。答えは見

いだせていません。私たち戦争世代も、平和世代の持つているものを失っているならば、それを取り戻す努力をしたいのです。戦争に関する映像や活字はありません。でも本当のことは分かりません。戦争では感覚的に異常なことを体感するものです。例えば、私は美味しそうな食べ物が目の前にあつても、それを見ただけで食べたように感じお腹いっぱいになることがあります。そういう意味では戦争について身をもって知ったのは死んだ人なのではないでしょうか。

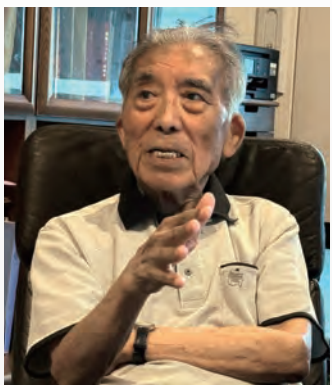
靖國神社の鳥居をくぐると涙が出てきます。英霊たちは、食べたいものも食わず、言いたいことも言えずに、本意でなく死んでいくのです。論じるよりは、実物が大事です。

特攻に出撃する前夜、実家の妹に宛て「兄は明日果てますが、父母のことをよろしく頼みます」

と綴つた若い飛行兵の遺書を読みました。死を直前にした人間の心の底からの真情が伝わってきます。戦死した人の名前と生年月日を見ると、私と同じ昭和五年生まれが何人もいます。生きている自分たちが伝えていくしかないません。

私を育ててくれた横浜には、全国いろいろなところから来た人が住人になっています。三日住んだらみんなハマっ子です。根っこからの横浜の人間です。みんなが横浜をもっと良くしていこう、一緒に助け合つて生きていこう。ハマっ子同士のそういう心のつながりを確かめるところが、横浜総鎮守伊勢山皇大神宮ではないでしょうか。

将来の横浜に思いをはせつつ、戦争体験を語りつぎ、平和を祈り続けたいと思います。



杉島和三郎さん

昭和三年（一九二八）横浜市生まれ。元街小学校から県立工業学校（現・神奈川工業高校）、早稲田大学理工学部卒。三菱重工業に入社、横浜製作所等でエンジニアとして活躍。一方で元町自治運営会会長を十六年間務めるなど地域の振興に尽力した。現在は諸役職を後継者に委ね、「元町の語り部」としてマスコミ取材やテレビ・映画出演等に勤しむ。元町厳島神社責任役員、伊勢山皇大神宮崇敬会副会長。

杉島和三郎さんの話

横浜大空襲を生き延び、 今平和を祈る

一 元町生まれ、元町育ち

私は昭和三年元町で自転車商を営む家に生まれました。名前の由来は昭和の和に三年の三で和三郎。「和」を信条に「和が人生」を歩んできました。

元街小学校を卒業後、機械いじりが好きだったこともあり、県立工業学校（現在の神奈川工業高校）機械科に入学しました。昭和十五年のことです。授業では代数や幾何学、製図などを学ぶようになり、三年生からは実習があり鋳物製作、機械加工でモ

ノづくりを実体験しました。

昭和十六年十二月、二年生のとき日米開戦。学校では軍事教練が強化され、校庭で腹ばいになつての匍匐前進や、富士の裾野での野営訓練を経験しました。十八年には学徒動員が始まり、私たちは陸軍補給廠田奈部隊（現在の「こどもの国」青葉区）にて高射砲の弾の箱詰め作業を汗びつしよりになつて行いました。農家に一週間泊まり込みで田植えや稲刈りなどにも従事しました。四、五年生になると授業はほとんどなく、東京や川崎の電機

工場で働きました。

元町では約十五世帯で隣組をつくり、防空訓練や竹やり訓練が行われ、出征兵士を駅まで見送りしたりしていました。二人の米軍兵士が落下傘で元町交番付近に降下してきたこともあり

二 横浜大空襲で衝撃

昭和二十年五月二十九日、横浜は大空襲に見舞われました。午前九時過ぎから一時間余り、五百機以上のB二九から大量の

県立工業学校生徒として勤労働員に従事



昭和30年伊勢山皇大神宮で正子夫人と挙式



焼夷弾が投下されたのです。学校にいた私は、空襲警報が鳴り響き防空壕に飛び込みました。別の防空壕は爆弾が直撃し先生一人が亡くなりました。「外に出ろ」と指示があり、木造校舎が燃えるので懸命の消火活動をしました。必死で恐怖を感じませんでした。校長命令で一斉退避することになり、混乱のなか丘の上に逃げました。市内のあちこちから煙が上がっていました。

家族は無事だろうか、茫然自失となり涙が止まりませんでした。それから一人で歩いて泣きながら自宅まで帰りました。道中焼け焦げた遺体や倒れて動けない人を見ましたが助けようという余裕はありません。見渡す限りの焼野原で絶望的な気持ちになりました。人生で見たなかで最も悲惨な光景でした。

元町に入る頃は暮れなずんでいました。わが家も見える影もな

かったのですが、家族は少し離れたバンドホテルに避難していて再会を喜ぶことができました。

三 終戦から復興へ

八月十五日の玉音放送は地元神社で聞きました。「耐えがたきを耐え、忍び難きを忍び……」流れてきた声は今も忘れられません。三十日にマッカーサーが横浜に進駐して来ました。どんな人なのか。野次馬根性で一人桜木町駅へ行き、ホテルニューグランドまで自転車で追いかけてました。元帥以下の米兵たちは、堂々とはつらつとしていました。完全な負けを実感し、これから日本の発展のため自分ももっと勉強しなければと誓ったものでした。

昭和二十二年早稲田大学理工学部に入學、二十七年卒業して三菱重工業横浜造船所に就職し

ました。機械設計から始めプラント輸出や公害対策など、戦後復興・経済成長にあわせ次々と新しい仕事を手掛けました。

堀川上に高速道路が建設されようという段階で元町の対策委員長を仰せつかりました。その後、自治運営会会長になり、会長になるとあて職として元町厳島神社奉賛会会長も兼ねることになりました。やがて同神社責任役員にも就きました。

昭和三十年、私は小学校同級生の妹と結婚。伊勢山皇大神宮で挙式しました。なんとと言ってもオール横浜の氏神さまで。元町に生まれ育ち、神奈川区の工業学校に学び、西区の職場で働いている自分にとってふさわしい式場に思えました。初めてお参りしたのがいつだったか実は覚えていません。きつと親が連れて行ってくれたのでしょうか。その後しばしばお参りするよう

杉島さんが責任役員を務める
元町厳島神社の神輿巡幸

伊勢山皇大神宮崇敬会の研修旅行(左端)



になっていました。地元元町の厳島神社が、伊勢山皇大神宮の宮司さんの兼務であることも身近に感じられた要因だったのでしょうか。

三菱重工グループの菱日エン지니어リングで社長の時、会社で伊勢山に玉垣を奉納しました。この会社は今ではもうありませんが、今でも社名入りの玉垣を表参道で見ることができます。毎年、伊勢山には正月、節分、例祭にお参りしています。

四 ささやかながら神社で平和を祈る

九十歳を過ぎてから、多くのお役目は後進に委ね、語り部として戦争体験などをお話しています。今年は昭和百年・戦後八十年ということで、マスコミ取材や講演などの依頼が多いです。映画「The Spirit of Yokohama」にも出

演しました。五月二十九日横浜大空襲、八月十五日終戦の前日には、十か所で講演などをしました。

戦争と平和について思うことですが、戦争を二度と起こさないようにしよう、と誰もが言います。しかし、神代の時代から現代のウクライナまで戦乱が絶えることはありません。どうしたら戦争を止められるのか、皆さまには具体策がありますか、と質問しても答えは返ってきません。戦争がおきようとするとき、どうしたら止められるか。私は偉い政治家ではないので、国政や国際政治の動きに関われません。しかし、戦争はむごたらしいモノだと伝えることで、戦争や平和を考えるときの材料にしてほしいと願っています。平和を叫び続けることが大切なのです。世界中の人がそうなることを願ってやみません。

どの宗教も、教会も寺も神社も戦いとのかかわりがありました

が、今こそそのような歴史をひっくり返すリーダーとして振る舞ってほしいと思います。原爆被害があつた日本だからこそ平和を望む、という活動を神社でやってほしいのです。靖国神社では戦没者慰霊をしています。神社には戦争が二度と起きないように日本国内でのリーダーシップをとってもらいたいです。

元町厳島神社では毎月二日に月次祭を行っていて、毎回二十人ほどが参列されます。祭典の最後に責任役員の一人として挨拶で「二度と戦争をしないように」と参列者の方々に申し上げています。ささやかですが、平和への願いが皆さんに広がれば良いと思っています。

呉正男さん

昭和二年（一九二七）台湾斗六市生まれ。小学校卒業後、来日して東京中野の旧制中学校に学ぶ。陸軍特別幹部候補生を志願し、爆撃機通信士となり朝鮮半島に赴任。現地で終戦を迎え、二年間旧ソ連に抑留される。帰国後法政大学卒業、横浜華銀に就職し理事長を最後に退職。横浜台湾同郷会会長、外国籍で初めて伊勢山皇大神宮総代を務めた。



一 外国籍で伊勢山皇大神宮総代に

平成九年、当時七十歳頃でした。野毛山に住んでいた私は早朝に伊勢山皇大神宮にお参りに来ました。その日は丁度月次祭の最中でした。それがきっかけで毎月の一日と十五日の月次祭に欠席することなく参列を続けました。

約十五年前の八十五歳の頃、私が熱心に月次祭に参列していることに当時の池田宮司さんが感動されたのか、横浜市内の有力企業の経営者でもないのに、私の総代就任について尽力してくださいました。神社責任役員の方々と神社庁の許可を得てく

二 台湾に生まれ十三歳で内地に

私が生まれたのは台南州斗六郡斗六街です。日本人も多く住んでおりました。大正十二年皇太子（後の昭和天皇）の台湾行啓があり、記念建築として洋館「斗六記念公館」が、私が生まれた昭和二年に建てられました。私の生家近く、良く憶えております。

八人兄弟の長男として生まれました。父は国語学校（後の台南師範）を出て斗六郡役所に勤務の公務員でした。日本語が堪能で私に正男、弟に義男と日本名を名付けました。家庭内で日本語を常用する「国語の家」に認定されました。

呉正男さんの話

生きている幸運は 神さまの差配と感謝

東京中野学園1年生の頃。日本名大山正男を名乗っていた。



私は幼稚園に三年通って少し日本語を覚え、日本人の「斗六尋常高等小学校」に入学することが出来ました。

小学校の隣接地が斗六神社でした。神社で祭典の時に宮司の補佐役として父は神職の姿で奉仕しておりました。父が腸チフスで入院の折は私と姉は神社境内の「お百度石踏み」に通っておりました。私にとって神社は身近な存在でした。

斗六小学校を卒業して嘉義中学校を二回も受験して不合格でした。父から内地に行けと言われ、素直に受け入れました。私は東京に新開校された中野学園中学の一期生として入学しました。中学一年の昭和十六年十二月に戦争が始まりました。新設中学校は諸設備が無く校庭整備作業が多く勉学には適せず、戦局の悪化もあり勤労奉仕や軍事訓練が増えました。

私は小学校で四年間剣道をしており中学二年の夏に初段となりました。いわゆる「硬派」の中学生でした。戦局が不利になり

医学部入学の自信もなくなり軍人になることを考えるようになりました。「日本人として国を守らねば」という思いでした。

私は親の許可も得ず新規募集中の「陸軍特別幹部候補生」を志望して昭和十九年四月「陸軍水戸航空通信学校」に入隊しました。同期生は十二個中隊の二千四百名でした。私は更に試験と適性検査を受けて一個中隊二百名の飛行機上通信士として選抜され、訓練を受けました。

昭和十九年十二月末、西筑波飛行場の「滑空飛行戦隊」に配属されました。約二十名の空挺隊員が搭乗できる大型滑空機（グライダー）を九七式重爆撃機がロープで曳行し、敵基地に降下させる奇襲隊でした。夏軍服に着替え出撃直前の爆撃機搭乗の通信士となりました。

南方に向け先発した空挺隊員の乗船した空母雲龍が上海沖で沈没したので戦隊の出撃は中止となりました。

昭和二十年五月末、戦隊は朝鮮の宣徳飛行場に移動しました。

連日の夜間の離着陸猛訓練でした。戦局は、既に沖縄は米軍に占領されており、夜間の猛訓練は明らかに敵飛行場に奇襲降下し破壊させるためと予期し覚悟をしました。

七月上旬頃、特攻意識調査がありました。飛行場内の神社前で渡された紙片に、志望、熱望、熱烈望の三字句がありました。

私は「順番が来たな」と熱烈望に〇印をつけました。（戦後隊長によると全員が熱烈望だった由です）私は特攻要員に選ばれませんでした。戦隊は「神龍特別攻撃隊桜空挺隊」を結成し二十年八月五日内地に向かいましたが、終戦となり幻のグライダー部隊となったのです。

三 ソ連に抑留、復員後横浜へ

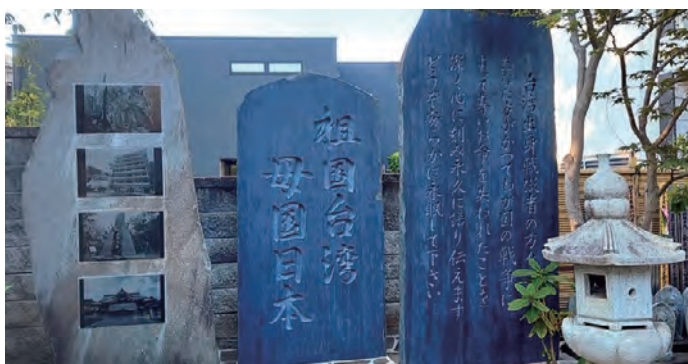
戦隊の主力を見送り約二百名が残留し、西北朝鮮の新安州飛行場に移動の予定でした。

八月十五日の玉音放送を聞きました。雑音が多くて難しい言葉を良く聞き取れず、八月九日

毎月1日と15日の月次祭には毎回参列（前列左から2人目）



磯子区真照寺に建立された台湾出身戦没者の慰霊碑



にソ連の満州侵攻があったので更なる激励と思いました。

残留戦隊員は平壤飛行場に入り内地からの新命令を待っていて三八度線より南下できず、ソ連兵に抑留されました。抑留者の九割がシベリア、モンゴル行きとなり寒さで多数の凍死者が出たようですが、私は中央アジアのカザフスタンでした。ここでは毎日わずかな食事で重労働に従事、野草を食べ回虫に悩まされるなどして体重は激減しました。苦労はしたものの、死を間近に見るということはありませんでした。抑留は平均三年でしたが、私は二年で済み、昭和二十二年日本に帰ることができました。

父からの手紙で「台湾に帰るな、日本の大学に行け」と言われ、旧制から新制への移行期ながら大学受験資格もなんとか認められ、法政大学に入学しました。

昭和二十九年に大学を卒業するころは、就職難でした。台湾に帰ることも、中国大陸で新しい国家建設に加わることも考えましたが、横浜華銀の職員として

就職しました。これが横浜との御縁の始まりです。

四 幸運を神さまに感謝

結局横浜華銀での勤務が長くなり理事長まで務めました。年齢を重ねて高齢者になりましたが、私はそういう自分を「幸齢者」と思っています。振り返るとカザフスタンでの二年間の抑留生活によって当時の台湾に帰郷できなかつたことが人生において本当に幸運なことだったと思います。神さまの差配に感謝しています。

私は幼少の頃から日本文化が身近にありましたから、神社にお参りするのは自然なふるまいなのです。横浜中華街での銀行員生活を振り返ると関帝廟の再建は大きな出来事でした。再建活動を通して政治対立していた人たちが歩み寄って一緒に成し遂げることができました。私は銀行員として中立の立場をとりつつ支援しましたし、個人的にもそれなりの額を寄附しました。

五 台湾出身軍人・軍属の慰霊碑建立

先の大戦では、私を含めて約二十一人万もの台湾出身者が日本の軍人・軍属となりました。私自身は「祖国台湾、母国日本」という思いでした。生き残って現在まで生きてこられたことに感謝をする一方で、戦没した台湾出身軍人・軍属約三万人のことを忘れることはできません。彼らは、終戦後に日本国籍を喪失し補償の対象外になってしまいました。台湾人であり日本国民でもあった彼らを慰霊する気持ちを形にしたくて、磯子区真照寺の住職さんや友人らの協力を得て、令和七年七月に「台湾出身戦没者慰霊碑」を建立することが出来ました。

私にとっての昭和百年と戦後八十年は節目にふさわしい年となりました。今日まで生きてこられたことを感謝しつつ、余命は幾許もありませんが、出来る限り伊勢山皇大神宮を崇敬し、月次祭には参列し続けたいと思っています。



昭和16年9月に境内「西征陣亡軍人の碑」前で開催された慰霊祭の全景

いせやま昭和写真帳

～戦前期を中心にして～



「伊勢山皇大神宮境内より市街を望む」(昭和初期)



関東大震災で焼失した社殿再建の上棟祭を斎行(昭和2年)



毎年9月23日前後に行われていた招魂祭での受付を務める女子生徒



横浜第一中学校全員が皇威宣揚武運長久祈願のため参拝。第一中学校(現・希望ヶ丘高校)は当時西区藤棚町にあった。



自動車と軍馬の併存が時代を感じさせる。



大横浜市全市の守護神として一般市民の敬拝する神社である、と説明がある。



昭和24年日本貿易博覧会野毛山会場から見た復興した市街
(横浜市中央図書館蔵)



昭和20年5月29日の横浜大空襲で焼け野原となった関内方面
(アメリカ国立公文書館所蔵)



軍装の団がラッパを吹き乗馬で参拝に訪れている。



昭和16年の絵葉書。紙面右に横鎮(海軍横須賀鎮守府)許可と表示されている。
(横浜市中央図書館蔵)

いせやま 歳時記

子之大神氏子地域戦没者
慰霊祭並びに平和祈願祭

九月二十三日、境内の記念館内「開明の間」にて「子之大神氏子地域戦没者慰霊祭並びに平和祈願祭」が、野毛地区各町会の方々のご参列のもと執り行われました。この神事では、大東亜戦争にて野毛地区より出征され亡くなった方々を中心とした戦没者の慰霊、そして平和祈願が奉仕されます。

子之大神は、野毛地区に鎮座していた「子神社」で、氏神として古くから祀られていましたが、昭和二十年の横浜大空襲により社殿が焼失して以降、伊勢山皇大神宮の末社である杵築宮に祀られているため、毎年当宮境内にて慰霊祭が行われております。

この神事では、明治十年の西南戦争における神奈川県下の戦没者、横浜市域の日清・日露戦争に



開明の間での神事の様子

おける戦没者の慰霊も合わせて行われます。昭和初期までは、境内に建立されている、「明治十年西征陣亡軍人之碑」（以下「軍人之碑」、「彰忠碑」という慰霊碑の前で、九月二十三日前後に行われてきました。

「軍人之碑」の前で行われた招魂祭（慰霊祭に同義）については写真も残っており、ご遺族を始めとする大勢の関係者が参列す

昭和5年 軍人之碑前での招魂祭
※関連写真12頁上段参照

る中で祭祀が執り行われたことが確認できます。また、「軍人之碑」には西南戦争において、神奈川県全域より出征し亡くなった方々百三十一名の出身地と名前が刻まれております。

当宮は明治三年に神奈川県により創建され、現在も横浜の総鎮守として篤い崇敬を受けておりますが、創建当初は、時の県知事であった井関盛良が伊勢山皇大神宮を『神奈川県宗社』と定め、国に認められるなど、当宮を神奈川県の中心的な社として認識していたことが史料からも伺え



彰忠碑

ます。そのため、西南戦争における神奈川県戦没者の慰霊碑が当宮に建立され、慰霊祭が行われたと考えられるのです。現在は、慰霊祭は記念館内にて行われますが、祭典当日に「軍人之碑」「表忠碑」「彰忠碑」の前には献花が手向けられ慰霊、そして平和への祈りが神職により捧げられます。

来たる令和九年には西南戦争から数えて百五十年という節目の年を迎えます。神社では、現在「軍人之碑」の修復工事を行っており、修復後は旧儀に復し、碑前での慰霊祭・平和祈願祭を執り行うため準備を進めております。

節分祭 — 豆撒き行事 —

令和八年二月三日

立春の前日である二月三日、伊勢山皇大神宮の御本殿、境内舞台にて節分祭並びに豆撒き行事が執り行われます。節分祭の起源は古く、平安時代に遡ります。当時は追儺、鬼やらいと呼ばれる、新年を迎えるための大晦日の宮中行事でしたが、徐々に民間の行事として広く浸透するとともに、明治時代に暦が旧暦（太陰太



御本殿での節分祭

陽暦）から新暦（太陽暦）に変わったことから、現在は二月の「春を迎える行事」として、各地の神社やお寺、地域の神事・行事として親しまれています。

当宮においても、港都横浜に春を呼ぶ恒例行事として、毎年多くの参拝者を迎えて、盛大に執り行われます。御本殿での厳粛な神事後、宮司を始め、神事に参列した年男女の方々による豆撒きが行われ、境内は福を授かるうとする善男善女で賑わい



豆撒き行事の様子

ます。豆撒き行事の後には、「当たり」の福豆を拾われた方へ「福物」が授けられ、さらに抽選で選ばれた方には特別な福物が授けられるなど、境内は豆撒き後も大変盛り上がりします。

「お申し込み」

福授けの年男女女として節分祭、豆撒き行事は事前にお申込みいただくことで、どなたでもご参加いただけます。ご興味のある方は社務所までお問い合わせ下さい。

如月厄除大祈禱

令和八年二月中

厄年とは、人生において様々な転機を迎える時期にあたり、災厄が起きやすいとされています。特に男性の四十二歳、女性の三十三歳は大厄ともいわれ重要な節目でもあります。古来、そのような年には、災難から逃れることを祈念して、節分の頃に厄除祈禱を受けることが習わしとなってきました。伊勢山皇大神宮では、年間を通



如月厄除大祈禱で授与される鈴祓絵馬

して厄除以外にも初宮詣、七五三詣などのお祝い、家内安全・営業繁昌・交通安全など様々な祈願を承っておりますが、節分が行われる二月には「如月厄除大祈禱」と称して厄除祈願を行い、特別記念品の「鈴祓絵馬」を授与しております。

また、厄除祈願は厄年ではない方もお受けいただくことができます。日々の生活の中で災いが続くなど、心機一転し、新たな気持ちで一年を始めたい方は年始に厄除祈願をお受けください。

崇敬会創立六十年

伊勢山皇大神宮崇敬会は、昭和四十年（一九六五）「伊勢山皇大神宮奉賛会」として設立され、令和四年「伊勢山皇大神宮崇敬会」と改称し現在に至ります。今年（二〇二五）創立六十周年を迎え、当時の資料から発足時を振り返ってみます。

設立委員会（昭和三十九年）で設立趣旨が説明されました。

昭和二十九年以降十一年間継続実施して参りました節分祭行事が歳を重ねて会員の数も増加し、この節分祭を通じて神祇崇敬、神徳宣揚の実を挙げ、併せて会員相互の親睦を増して参りましたが、次いで昭和三十六年に至り本節分会の希望者に依り伊勢神宮参拝旅行を実施し爾後恒例行事として既に六回を重ねて益々盛況に実施されて参りました。（中略）

祖先崇拜の精神は親子の敬愛より始まります。平和な家庭、住み良い社会を造り、報恩感謝の心を培うことが現今の急務であります。節分会々員を中心に氏子崇敬者篤志の方々に依って奉賛会設立の重

要性を痛感し、設立委員会を構成して次の委員会を開催し審議致して参りました。

これを受け、昭和四十年六月二十日奉賛会が発足しました。

総裁には東久邇聰子様（明治天皇第九皇女）を戴き、初代会長に磯野庸幸氏が選出されました。顧問に藤山愛一郎氏、参与として神奈川県知事、横浜市長などが記されています。

東久邇総裁からは「奉賛会結成奉告祭並発会式」にお言葉も頂戴しました。

明治三年県令に依って伊勢皇大神宮の御分霊を拝受されまして横浜港一円の守護神に御奉斎申し上げましてから約百年の永い歳月を経ましたが、大稜威の弥高く市民の崇敬真に厚く御社の益に榮えて参りますこと謹んで御慶び申し上げます。

この度伊勢山皇大神宮奉賛会が設立致されまして我が国傳統の敬神崇祖、報恩感謝の誠を捧げ御奉賛することとなりまして本日発会式を盛大に挙行されますことは御同慶に絶えない次第で御座います。世相益々に自重を要する時にあ

たりまして会員心を協せ本会の目的達成に御協力下さいます様希望致します。

総裁 東久邇聰子

発足時四十名程の会員数は、現在五百七十名と発展を遂げました。参宮旅行や節分祭に加え、神道研修講座や餅つき大会、懇親行事等活動が充実しています。繋いできた歴史を更に発展させるため、皆様の御協力を宜しく願います。

文・権欄宜 増田源弘



伊勢山皇大神宮節分祭
昭和二十三年二月三日

伊勢山皇大神宮
崇敬会会員募集中
入会申込はこ
ちらから



ホームページ



<https://www.iseyama.jp/>



インスタグラム



<https://www.instagram.com/iseyamakotaijingu.official/>



フェイスブック



<https://www.facebook.com/iseyama.official/>



伊勢山皇大神宮

社報『いせやま』第26号

令和7年11月23日発行（年2回）

発行所 伊勢山皇大神宮 総務課 電話 045-241-1122

住所 〒220-0031 横浜市西区宮崎町64番地

発行者 阿久津裕司

印刷 山陽印刷株式会社